F 24　現代婦人の生活構造と家政教育（5）　家族生活状況を中心にみた場合

広島大教育　○山田綾　関志比子　菊沢康子
島根大教育　多々納道子

目的　生涯教育的視点で家政教育を考える場合、婦人の学校後の学習は婦人の生活構造の諸要因による影響を受けることが考えられる。本報では、家族生活状況に関して、家族形態および家庭運営における役割上から、婦人の学習活動に関する事項や期待を明らかにすることにより、学校後の家政教育の体系を検討する手がかりを得たいと考える。

方法　前報と同様である。対象者は、単身者 7.0%，核家族 53.0%，拡大家族 28.0% である。また、役割の類別については、家事担当の有無およびその主担当 72.0%，副担当 13.0%，育児担当の有無およびその主担当 40.0%，副担当 5.0% の構成である。

結果　家族形態別には、①単身者の学習への参加率は低く、特に婦人会、町内会等の学習活動には消極的であり、今後の参加意欲も低調であった。②学習参加の理由は、単身者に特徴がみられた。③知識・技術の供給源に対する相違は僅差であった。家庭運営の役割別には、①学習参加の状況は、家事・育児を一人で担当している者の学習参加率は低いが、学習形態によっては家事・育児の担当者が積極的な参加傾向を見せていた。②学習参加の理由にはばらつきがみられるが、家事・育児の主たる担当者に特徴がみられ、「生活の充実」をめざす者が多かった。また、学習活動の不参加は、同居者に子どもや病人、老人がいることが主な理由であり、家事・育児の主担当者にこの理由が目立った。③知識・技術の供給源は、家事の主担当者が他よりも「マスメディア」に求めており、また、家事の副担当者および非担当者の方に、「家庭」を供給源とする者が多かった。